

平成27年（2015）4月のある日のこと、六本木ヒルズから西麻布のレストランへ向かっていたとき、突然、延々と張られたフェンスが現われた。ハーディバラックスと呼ばれた六本木基地だった。

U.S.Army Area／在日米陸軍地域／許可なき者立ち入り禁止／違反者は日本国法律により罰せられます。

此のゲートは非常用のみ／使用される／塞ぐべからず

この時代色を帯びた日本語の看板を見るだけでも、フェンスの前に立つ価値がある。近くに国立新美術館がある。

同年6月、福生市にある米空軍横田基地に入った。広大なフェンスの中にアメリカの小さな田舎町がある。教会、映画館、学校・・・が映画撮影所のセットのように並び、遠くにオスプレイが駐機していた。

全国各地の米軍基地が日本を威圧していた昭和30年（1955）、日蓮宗は世界立正平和運動を開始した。

平成28年（2016）1月、日蓮宗宗務院で開催した第16回日蓮宗教化学研究発表大会の特別発表「戦後日本の宗教者平和運動を再考する」の中で大谷栄一氏（佛教大学社会学部教授）は次のように語った。

宗祖・日蓮聖人の立正安国論の姿勢に見られる日蓮仏教がもともと有する社会性・政治性は、平和運動の実践を果たして意味づけることができるのか。それができるのではないかと、というのが私の見解です。現在、公共空間における宗教の社会的・政治的役割が世界中で問い直されています。エンゲイジド・ブディズム（社会参加仏教）が世界的に注目をされている中、日蓮仏教はどのように、その社会性・政治性を発揮できるのか。宗祖の立正安国の理念を、現代世界の中でどのように実現をしていくのか。そもそも、現在、立正安国をどのように捉え、

国内外の人々にアピールしていくのか。それを考えるとき、戦前の立正報国や戦後の立正平和の意味を改めて捉え直すことが必要ではないかと思えます。

平成26年（2014）12月26日、タイのプーケットで「インド洋津波犠牲者十周年追善並世界平和祈願法要」が勤修された。追悼文には次のような一節がある。



※写真は第13回忌のときのもの（2016年11月5日）

我ら慎みてみ仏のみ教えを信受し人類全体が安らかで穏やかなる世界を希求し「いのち」の大切さを伝え弘め世界平和仏国土顕現に邁進することを誓願す。

私たちが「宗祖の立正安国の理念を」「国内外の人々にアピールしていく」のは、このような機会である。この大切さは言うまでもないが、かつて、『日蓮宗新聞』（2012年7月10日）〈論説〉に伊藤佳通師は次のように指摘している。

インドシナ半島といえば仏教圏というイメージが未だに強い。（略）しかし人々の心の中から仏教の存在は確実に薄れつつある。（略）実際、イスラム教に改宗したタイ人の多くに共通した認識がある。それは「仏教は何もしてくれない」ということだ。（略）

葬儀も年忌も祈りの儀式である。それはそれで大切であるが、それで貧しい人たちが救われるわけではない。むしろそれが経済的な負担ですらある。（略）豊かな人たちのみを対象とした宗教はいずれ不要と見なされるに違いない。

国際的リゾート地であるプーケットのカマラビーチにあるサンプライムホテルの一角に、多くの日本人を始め、被災者のための慰霊碑がある。

慰 霊 之 碑

とこしえ なぎ ねが
久遠の風を願う



背面には、津波発生時の全日本仏教会会長、藤井日光師の追悼文が記されたプレートがある。

争いのやまない世界の「久遠の風」を実現していくために立正安国論の理念をどのようにとらえていくのかが問われている。



タイ・プーケットのカマラビーチ